

源氏物語

(岡山製本)

大正三年五月十七日印刷
大正三年五月二十日發行
有朋堂文庫
源氏物語二
(非賣品)

編輯者 三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者 平井登

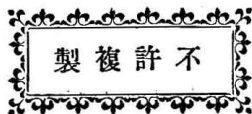
東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社分工場

東京市本所區番場町四番地

發行所 有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地



不許複製

源氏物語貳目錄

松風	一
薄雲	二七
槿	六三
少女	八九
玉鬘	一五一
初音	一〇一
胡蝶	二九
螢	二四五
常夏	二六九

篝	火		二九七
野	分		三〇三
行	幸		三三五
藤	袴		三五九
眞	木柱		三七七
櫛	枝		四二三
藤	裏葉		四七七
若	菜(上)		四七七

物語

風かぜ

榊 樓

花姫君と共に大堰移る。① 明石入道の邸を修理して明石上
理して明石女にす。② 明石上母の尼明石姫君と共に大堰の邸に移る。
桂殿に宴す。③ 明石姫君き住居。④ 源氏明石上を訪ふ。邸内を修理せ
り。⑤ 明石姫君として桂殿に宴す。⑥ 歸京。紫上の嫉妬。明
石姫君を紫上の養女にすべき相談。

- 花散里、六條東院に移る
- (一) 六條東院、源の別邸
- (二) 引取る
- (三) 事務所
- (四) 明石上の住居と定む
- (五) 幾つにも臨劃して作りたるが

東ひんかしの院ゐんつくり立てて、花散里はなちるさきと聞えし、うつろはし給ふ。西にしの對たい、渡殿わたのどのなどか
けて、政所まさどころ、家司けいしなど、あるべき様にし置かせ給ふ。東ひんかしの對たい、明石あかしの御方おんかたと思
しおきてたり。北きたの對たいは、殊ことに廣ひろく造つくらせ給ひて、かりにても、哀あはれと思おもひて行末ゆくすゑ
かけて契ちぎりたのめ給ひし人々ひとの、集つぎひ住すむべき様に、隔へだてくしつらはせ給へる

(一) あけ置きて源の休息所に宛て、其積の裝飾を施す

● 明石入道大堰の邸を修理す

(二) 明石上の上京を促せども

(三) 明石上の心、ずつと勝りたる身分の女でも棄つるでもなく寵するでも無き源の仕方にて心配が絶えぬといふ噂なるに

(四) 我如き者がどれ程の寵あればとてあの人々の中に顔を出されやう

(五) 上京せば馬脚を露はして此子の恥になる計

(六) 上京しても源の稀に來るを持つ位なもので、外聞悪く極り惡さはどの様ならん

(七) 此子が田舎に育ちて人らしくも思はれぬのも可愛そうなれば

(八) 源の招に

(九) 途方にくれた

(一〇) 明石上の母の祖父

(一一) 其子孫

(一二) 入道夫婦がなるべし

しも、懐^{なつか}しう見^み所^{ところ}ありて細^{こま}かなり。寢^{しんでん}殿^{でん}はふたけ給はず、時々^{ときとく}渡^{わた}り給^{たま}ふ御休^{みやす}所に

して、さる方^{かた}なる御^{おん}しつらひどもし置^おかせ給^{たま}へり。

明石^{あかし}には御消息^{おんせうし}絶えず、今^{いま}は猶^{なほ}上^{のほ}り給^{たま}ひぬべきことをば宣^{のたま}へど、女^{をんな}は猶^{なほ}我身^{わがみ}の程^{ほど}

を思^{おも}ひ知^しるに、こよなくやむごとなき際^{きは}の人々^{ひと}だに、なか／＼さてかけはなれぬ

御有^{おんあり}様のつれなきを見つゝ、物思^{ものおも}ひまさりぬべく聞^きくを、まして何^{なに}ばかりの覺^{おぼ}え

りとてか、さし出^いでまじらはむ、この若君^{わかぎみ}の御面^{おんおもて}伏^{ふせ}に、數^{かず}ならぬ身^みの程^{ほど}こそあら

はれめ、たまさかに這^はひ渡^{わた}り給^{たま}ふ序^{ついで}を待^{まち}つことにて、人笑^{ひとわら}へにはしたなき事^{こと}如何^{いか}

にあらむ、と思^{おも}ひ亂^{みだ}れても、また、さりとして斯^かかる所^{ところ}にて生^おひ出^いで數^{かず}まへられ給

はざらむも、いとあはれなれば、ひたすらにもえ恨^{うら}み背^{そむ}かず。親達^{おやたち}もけに理^{ことわり}と

思^{おも}ひ歎^{なげ}くに、なか／＼心^{こころ}も盡^{つく}きはてぬ。昔母君^{むかしははぎみ}の御祖父^{おんおまぢ}、中務^{なかつかさ}の宮^{みや}と聞^{きこ}えけるが、

領^{らう}じ給^{たま}ひける所^{ところ}、大堰^{おほひ}河^{かは}の邊^{わたり}にありけるを、その御後^{おんのち}、はか／＼しうあひ繼^つぐ人^{ひと}

もなくて、年頃^{としごろ}荒^あれ惑^{まど}ふを思^{おも}ひ出^いでて、かの時^{とき}より傳^{つた}はりて、宿守^{やどりもり}の様^{やう}にてある

(一) 見限りて

(二) 急に人中に出ては間が狭く

(三) 舊縁の所を便りて其處に落着かんと

(四) 入用の物は明石から廻送する故

(五) 形の如く住み得る様に修繕してくれぬか

(六) 私は

(七) 源氏

(八) 大井川附近が

(九) 閑静が御望ならば其點で當がはづれるならん

(一〇) 其も差支なし、源の保護の下に立ちてと思ふ事ある故

(一一) 家の内のかまきき手入

(一二) 私の外に彼の邸を相續し居る持主なき故、のんきな田舎の事として私が年來隠居し居たる譯也

人を、呼び取りて語らふ。入道「世の中を今はと思ひはてて、かゝる住居に沈み初めしかども、末の世に思ひかけぬ事出でてなむ、更に都の住處覓むるを、俄にまばゆき人中心とはしたなく、田舎びにける心地も靜なるまじきを、舊き所尋ねてとなむ思ひ寄る。然るべき物はあけ渡さむ。修理などして、かたのごと人住みぬべくは繕ひなされなむや」といふ。あづかり、「この年頃領する人もものし給はず、怪しき藪になりて侍れば、下屋にぞ、繕ひて宿りはべるを、この春の頃より、内の大殿の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたりなむ、いと人氣騒しうなりにて侍る。厳しき御堂ども建てて、多くの人なむ造りいとなみ侍るめる。靜なる御本意ならば、それや違ひ侍らむ」入道「何かそれも。かの殿の御かけに、かたかけてと思ふことありて。おのづから追々に内の事どもはしてむ。まづ急ぎて大方の事どもを物せよ」といふ。預「自ら領する所に侍らねど、又知り傳へ給ふ人もなければ、かごかなる習ひにて、年頃かくろへ侍りつるなり。御庄の田畑などいふこと

(一) 中務宮の子孫なるべし、此人に私が上申して相續の代價を拂ひて我物とし作り居りますすが
 (二) 所有物を取上げられはせぬかと危みて
 (三) つんとしたるの意態
 (四) 蜂を吹きて防ぐ様に空囀き
 (五) 我は構はぬ故今迄通りと心得よ
 (六) 田畑の證書は我手にあれども
 (七) 其地所の事を食議もせざりしが
 (八) 追てよく整理せん
 (九) 源の風を吹かせるのぞ預も事面倒と思ひて
 (一〇) 入道が思附を源は知らずして
 (一一) 明石姫の田舎に寂しく成長するは外の聞えも宜しからじと思ひ居しに
 (一二) 大堰邸の修繕終りて、事の次第を入道が源に通知せり
 (一三) 源の心、明石上が人中に出るを嫌がるは
 (一四) 源の秘密にはいつも携はる人なれば

のいたづらに荒れ侍りしかば、故民部大輔の君に申し賜はりて、さるべき物など奉りてなむ、領じつくり侍るを」など、そのあたりの貯の事どもを危げに思ひて、鬚がちにつなし憎き顔を、鼻などうち赤めつゝはちぶきいへば、入道「更にその田など様の事は、こよには知るまじ。唯年頃のやうに思ひてものせよ。券などはここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年頃ともかくも尋ね知らぬを、そのことも今委しく認めむ」などいふにも、大殿のけはひをかくれば、煩はしく、その後物など多く受取りてなむ、急ぎ造りける。かやうに思ひ寄るらむとも知り給はで、上らむ事を物憂がるも心得ずおほし、若君のさてつくぐと物し給ふを、後の世に人の言ひ傳へむ、今ひとときは人わろき疵にやと思ほすに、造りはてでぞ、しかぐの所をなむ思ひ出でたると聞えさせける。人にまじらはむ事を苦しけにのみものするは、かく思ふなりけりと心得給ふ。口惜しからぬ心の用意の程かな、と思しなりぬ。惟光朝臣、例の忍ぶる道は、いつとなく、いろひ仕う奉

(一)大堰邸の邊は景色よくて海邊に似たり

(二)源の心、其様な住居には明石上の人柄相應すべし

(三)瀧を控へたる建物

(四)大覺寺に

(五)明石上の邸は

(六)無造作に建てたる

(七)手を省きたる

(八)惟光見分の後には室内の裝飾まで源が工夫す

目 明石上大堰の邸に移る、大堰の寂しき住居

(九)迎の爲明石へ

(一〇)明石上が彌々上京と思ふと

(一一)我はどうして斯く心配が絶えぬ様に出来て居るのであらうと源に關係なき人が羨しく思はる

(一二)眞と離れて暮す氣がかりさが

る人なれば、遣して、さるべき様に此處彼處の用意などせさせ給ひけり。惟光「あ

たりをかしうて、海面に通ひたる所のさまになむ侍りける」と聞ゆれば、さやう

の住居に、よしなからずはありぬべしと思す。造らせ給ふ御堂は、大覺寺の南に

あたりて、龍殿の心ばへなど、劣らずおもしろき寺なり。これは川面に、えもい

はぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる、寢殿のことそぎたる様も、おのづか

ら山里の袁を見せたり。内のしつらひなどまで思し寄る。

親しき人々、いみじう忍びてくだしつかはす。遁れ難くて今はと思ふに、年經つ

る浦を離れなむことあはれに、入道の心ほそくて一人留らむことを思ひ亂れて、よ

ろづに悲し。すべてなどかく心づくしになり始めけむ身にかと、露のかよらぬ類

うらやましく覺ゆ。親達も、かよる御迎にて上る幸は、年頃寢てもさめても願ひ

わたりし志の叶ふと、いと嬉しけれど、あひ見で過ぎむいぶせさの、堪へ難う

悲しければ、晝夜思ひほれて、同じ事をのみ、「さらば若君をば見奉らでは侍るべ

(一) 夫の入道と同居せず
(二) 娘が居なくなる以上は誰にひかされて留り居らんや
(三) 一時の浮氣で逢ふ中さへ別れは悲しきに
(四) みな木のみなれそなれ離れなば戀しからんや戀しからじや
(五) 偏屈な夫の容貌氣象は戀しくもなけれど
(六) 此處を死所として餘生を送る積で諸共に住み來りしに
(七) 京より來て悲み居たる人々は
(八) 又來て見る事はなるまじと
(九) 今日出發といふ當日思はれるに
(一〇) 蟲の音まで忙しく
(一一) 明石上が
(一二) 後夜の佛前の勤から直に起き居て
(一三) 縁喜をいへども
(一四) 悲が
(一五) 入道の心明石姫はつき給へる此姫君を片時も見ずには是から居られまじと思へば涙を包みきれず
(一七) 心ぎまより思ひながら挿入文、性質杯が非常に人と違ひたる自分を思ふべき物に思ひながら

きか」と言ふよりほかの事なし。母君もいみじう哀なり。年頃だに、同じ庵にも住まずかけ離れつれば、まして誰によりてかはかけ留らむ。唯、あだにうち見る人の、淺はかなる語らひだに、見なれそなれて別るゝ程は、たゞならざめるを、ましてもて僻めたる頭つき、心おきてこそ頼もしけなけれど、又さる方に、これこそは世を限るべき住家なめれと、ありはてぬ命を限に思ひて、契り過し來つるを、俄に行き離れなむも心細し。若き人々のいふせう思ひ沈みつるは、嬉しきものから、見捨て難き濱のさまを、又はえしもかへらじかしと、寄する波に添へて、袖濡れがちなり。秋の頃ほひなれば、物のあはれ取重ねたる心地して、その日とある曉、秋風涼しくて、蟲の音もとりのあへぬに、海の方を見出して居たるに、入道、例の後夜より深う起きて、鼻すよりうちして、行ひいましたり。いみじう言忌すれど、誰もくいと忍びがたし。若君は、いともく美しけに、夜光りけむ玉の心地して、袖より外に放ち聞えざりつるを、見馴れてまつはし給へる、心ざ

(二) 將來の幸福を祈る別に臨みて

(二) 都を出し時は夫と一緒なりしに、歸る今は夫に別れて路にも逢ふべし
(三) 尼君の心、年來速深ひし事を思へば
(四) 明石上

(五) 今別れては再會は期もなきに、何を當に再會を契るべき

(六) 見送りにても一緒に出發し給へ

(七) 色々の點からそう出来ぬ様に入道が言ひて

(八) 入道が氣難りに思ふ

(九) 他國に

(一〇) 明石上の爲に

(一一) と思ひて來りし譯なるが

まなど、ゆよしきまで、かく人に違へる身を、いまくしく思ひながら、片時見奉らでは、いかでか過ぎむとすらむと、つよみあへず。

入道(一)行くさきをはるかに祈る別れ路にたへぬは老の涙なりけり

いともゆよしや」とて、おし拭ひかくす。尼君(二)

もろともに都はいできこのたびやひとり野中の道にまどはむ

とて泣き給ふ様、いと理なり。こゝら契りかはして積りぬる年月の程を思へば、

斯う浮きたる事を頼みて、捨てし世にかへるも、思へばはかなしや。御かた、

明石(五)「いきて又あひ見むことをいつとてか限も知らぬ世をば頼まむ

おくりにだに」と、切に宣へど、かたぐにつけて、え然るまじき由を言ひつゝ、

さすがに道のほども、いとうしろめたき氣色なり。入道世の中を捨て始めしに、

かゝる人の國に思ひ下り侍りしことも、たゞ君の御ため思ふやうに旦暮の御かし

づきも心に叶ふやうもや、と思ひ給へ立ちしかど、身の拙かりける際の、思ひ知

- (二) 國守の古手などと言はれて公私につけて侮られ親を辱むるに忍びず、出家して都を出しは即ち世を捨てし也と人にも思はれしが
 (二) 貧しき……もののかち 挿入文
 (三) 一身の進退に就ては自ら思切よしと思ふに
 (四) 明石上が物心つくに随ひ
 (五) つまらぬ田舎であたらぬを日蔭者にするのかと
 (六) 思も寄らず源に奉る事を得ても
 (七) 又却て自分の賤しきを悲みたれど
 (八) 明石姫が
 (九) 姫は其様を運命の人では無く思はるれば
 (二〇) 姫を見ぬ我悲は忍び難けれど

らるゝ事多かりしかば、更に都に歸りて、古受領のしづめる類にて、貧しき家の蓬葎よもぎむらの、もとの有様あらたむる事もなきものから、公私おほやけわたくしにをこがましき名をひろめて、親の御なきかけを、はづかしめむことのいみじさになむ、やがて世を捨てつる首途なりけりと、人にも知られにしを、その方につけては、よう思ひ放ちてけりと思ひ侍るに、君のやうくおとなび給ひ、物思ほし知るべきに添へて、などかう口惜しき世界にて錦をかくし聞ゆらむと、心の闇晴間なく歎きわたり侍りしまゝに、佛神を頼み聞えて、さりとて、斯う拙き身に引かれて、山がつの庵にはまじり給はじと、思ふ心一つに頼み侍りしに、思ひより難くて、嬉しき事どもを見奉りそめても、なか／＼身の程をとさまかうさまに悲しう歎き侍りつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、かゝる渚に月日を過し給はむも、いとかたじけなう。契ちぎりことに覺え給へば、見奉らざらむ心惑はしづめ難けれど、この身は長く世を捨てし心侍りき。君達は、世を照し給ふべき光著けれ



- (一) 我を斯く愁ますべき
前世の約束なるべし
(二) 天人果報盡きて餓鬼
畜生地獄の三惡道に歸る
時
(三) 我死せりと聞きても
法事も替むな、死別を悲
むな
(四) 死ぬまでは
(五) 思切惡く佛に願ふ事
の一にせん
(六) 泣面する
(七) 一部分づつ
(八) はのゝと明石の浦
のの歌などを思へるな
らん
(九) 煩惱が斷ちきれそう
にもなく
(一〇) 尼君が
(一一) 彼岸の淨土に往か
ん事を望みて都を離れし
に、棄てたる都に又立歸
る事よ、海士―尼

ば、暫^{しば}しかよる山^{やま}がつの心を、亂^{みだ}り給ふばかりの御契^{おんちぎり}こそはありけめ。天^{てん}に生^{うま}る人^{ひと}の、あやしき三つの途^{みち}に歸^{かへ}らむ一時^{ひととき}に思^{おも}ひ擬^{にな}へて、今日^{けふ}長^{なが}く別^{わか}れ奉^{たてまつ}りぬ。
(一)
命^{いのち}盡^ききぬと聞^{きこ}召^{しめ}すとも、後^{のち}の事^{こと}思^{おも}ほしいとなむな。さらぬ別^{わか}れに御心^{みこころ}動^{うご}し給ふな」
(三)
など、言^いひ放^{はな}つものから、入道^{いどう}煙^{けまり}ともならむ夕^{ゆふ}までは、若君^{わかぎみ}の御事^{おんこと}をなむ、六時^{ろくじ}
(四)
のつとめにも、なほ心^{こころ}ぎたなくうちまぜ侍^{はべ}りぬべき」とて、これにぞうちひそみぬ
(五)
る。御車^{みくるま}はあまた續^{つづ}けむも所^{ところ}せく、かたへづつ分^わけむも煩^{わづら}はしとて、御供^{おんぐも}の人々^{ひとびと}
(六)
も、あながちに隠^{かく}ろへ忍^{しの}ぶれば、船^{ふね}にて忍^{しの}びやかにと定^きめたり。辰^{たつ}の時に船出^{ふなで}し
(七)
給ふ。昔^{けかし}の人^{ひと}も哀^{あは}れといひける浦^{うら}の、朝霧^{あさぎり}隔^{うへだ}たり行^ゆくまよに、いと物悲^{ものかな}しくて、入^い
(八)
道^{みち}は、心^{こころ}すみはつまじく、あくがれて眺^{なが}め居^ゐたり。こゝら年^{とし}を經^へて今更^{いまさら}に歸^{かへ}るも、
(九)
なほ思^{おも}ひつきせず、尼君^{あまぎみ}は泣^なき給ふ。
(一〇)
尼^にかのきしに心^{こころ}よりにし海士^{あまぎみ}船^{ふね}のそむきしかたに漕^こぎかへるかな
(一一)
御^{おん}かた、

(一) 幾秋を明石に過して
今我は都に歸るならん、
浮木は船

(二) 順風

(三) 都に

(四) 簡單に

(五) 大堰邸の

(六) 明石に似たれば

(七) 十分子が届いて造り
ては無けれど、居副染め
ば居られそうなり

(八) 源が

(九) 到著の樂筵

(一〇) 源自身の訪問

(一一) 明石上が都に來て
却て心配多く

(一二) 源に貰ひし琴

(一三) 場合が非常に悲を
誘ひて堪へ難き故

(一四) 一人生れ變りて歸
りたる思する故郷に

明石いくかへり行きかふ秋を過しつゝ浮木にのりてわれかへるらむ

思ふ方の風にて、限りける日違へず入り給ひぬ。人に見咎められじの心あれば、

道の程も輕らかにしなしたり。家の様もおもしろうて、年頃經つる海面に覺えた

れば、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、哀なること多かり。作

り添へたる廊など、故ある様に、水の流もをかしうしなしたり。まだ細やかなる

にはあらねど、住みつかば然てもありぬべし。親しき家司に仰せ給ひて、御まう

けの事せさせ給ひけり。渡り給はむことは、とかう思したばかり程に、日頃經ぬ。

なか／＼物思ひつゞけられて、棄てし家居も戀しうつれ／＼なれば、かの御かた

みの琴をかきならす。折のいみじう忍び難ければ、人離れたる方に打解けて少し

弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君物悲しけにて寄り臥し給へる、起き

あがりて、

尼身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松かぜぞ吹く

(二) 明石なる親を慕ひて
悲を琴に托する其音を聞
き知る者もあらじ、こと
一言、琴

(四) 源氏明石上を訪ふ

(二) 大堰邸へ源が訪問
(三) 紫には疎に知らせざ
りしが、跡での發覺を恐
れて知らせる

(四) 行くべき用事あるに
(五) 尋ねてやる約束の人
まで

(六) 彩色せぬ佛なるべし
(七) 紫の心、桂院は源の
別荘にて明石邸とも御堂
とも別なるを紫がよく知
らずして一つに思ふ也

(八) 明石上を

(九) 不快なれば

(一〇) 何時歸られる事や
ち、晉の王質石室山に入
り斧に腰かけて仙人の國
基を見る、歸らんとし
て起れば斧の柄既に朽ちた
り、驚いて家に歸れば七
世の孫に遇へり
(一一) 調子の合せにくき
(一二) 昔の浮氣は影も無
いと世間でも言ふのに

御かた、

明石故里に見し世の友を戀ひわびてさへづることをたれかわくらむ

(二)

かやうに物はかなくて明し暮すに、大臣、なか／＼しづ心なく思さるれば、人目

をもえ憚りあへ給はでわたり給ふを、女君には、斯くなむと確に知らせ奉り給は

(三)

(三)

ざりけるを、例の聞きもやあはせ給ふとて、消息聞え給ふ。源桂に見るべき事侍

(四)

るを、いさや心にもあらで程經にけり。とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり

(五)

近く來居て待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、かざりなき佛の御

とぶらひすべければ、二三日は侍りなむ」と、聞え給ふ。桂の院といふ所、俄に

(六)

(七)

作らせ給ふと聞くは、そこにすゑ給へるにやと思すに、心づきなければ、紫斧の

(八)

(九)

柄さへ改め給はむほどや、待遠に」と心ゆかぬ御氣色なり。源例のくらべ苦しき

(二)

御心かな。いにしへの有様名残なしと世の人もいふなるものを」と、何やかやと

(二)

御心とり給ふ程に、日たけぬ。忍びやかに、御前疎きはまぜで、御心づかひして